

平成17年度岩手県立総合教育センター

中学校英語科における 書く力を高める指導に関する研究

-コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導と
4領域を関連させた総合的な言語活動の工夫をとおして-

(第1年次)

研究協力校

花巻市立大迫中学校

岩手県立総合教育センター
教科領域教育室
千葉龍太郎

〈目 次〉

I	研究の目的	1
II	研究仮説	1
III	研究の年度計画	1
IV	本年度の研究内容と方法	2
V	研究結果の分析と考察	2
1	中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本的な考え方	2
(1)	学習指導要領における実践的コミュニケーション能力について	2
(2)	書く力の実態の概要	2
(3)	書く力が定着しない原因	3
(4)	中学校英語科における書く力が育った生徒の姿	3
(5)	中学校英語科における書く力の構成要素	4
2	中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想	5
(1)	「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践的コミュニケーション能力を養う指導について	5
(2)	「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践的コミュニケーション能力を養う指導過程に「書くこと」の指導を関連付けた指導	6
(3)	コミュニケーションを志向した音読指導	7
(4)	中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想図	8
(5)	基本構想に基づく指導の進め方	8
3	コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導のための手だての試案	10
(1)	コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導のための手だて	10
(2)	コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導のための手だての試案	10
VI	研究のまとめ	12
1	研究の成果	12
2	今後の課題	12

おわりに

【引用文献】

【参考文献】

I 研究の目的

中学校英語科では、生徒に実践的コミュニケーション能力の基礎を養うことが求められている。特に「書くこと」の領域においては、与えられた語や文を書き写すことができるだけでなく、自分の考えなどを書くことができることを重視している。しかし、本県の学習定着度状況調査の結果を見ると、目指す能力が十分に身に付いているとは言えない。特に「書くこと」の正答率は他の領域に比べて著しく低い状況が見られる。

英語が書けない理由には、①語彙が習得されていない、②基本的な文法や語順が理解できていない、③まとまりのある複数の文を書くことに慣れていない等、様々なレベルの要因があると考えられる。これまでの「書くこと」の指導は、単語や基本文の書き取り等、繰り返し練習して覚える活動に重点が置かれてきた。しかし、こうした練習のみでは断片的な記憶にとどまりがちで、語彙や英文構造の定着が十分には図られなかった。また、授業の中で実際にコミュニケーションを目的として書くという経験も不足していたと考えられる。

こうした状況を改善するためには、まず、基本的な語彙や文法・語順等の基本的英文構造の知識といった、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導を継続的に行う必要がある。その際、単なる反復練習だけでなく、実際にコミュニケーションを図る活動と連動させて指導することが重要である。そして、そのような基礎的能力を基に、「書くこと」と他の領域（「聞くこと」「話すこと」「読むこと」）とを関連付けた総合的な言語活動につなげていくことが大切である。

そこで、この研究は、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導と、4領域を関連させた総合的な言語活動の工夫をとおして、中学校英語科における書く力を高める指導の在り方を明らかにし、学習指導の改善に役立てようとするものである。

II 研究仮説

中学校英語科において、次のような指導を行えば、書く力を高めることができるであろう

- ・ コミュニケーションを志向した音読指導を1単位時間に設定し、継続的に指導し、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う。
- ・ コミュニケーションを支える基礎的能力を基に「書くこと」を他の領域と関連付けた総合的な言語活動を計画的に行う。

III 研究の年次計画

この研究は、平成17年度から平成18年度にわたる2年次研究である。

1 第1年次（平成17年度）

- (1) 中学校英語科における書く力を高める指導についての基本的な考え方の検討と基本構想の立案
- (2) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的指導方法の具体的な手立てを組み入れた試案の作成

2 第2年次（平成18年度）

- (1) コミュニケーションを支える基礎的能力を基にした総合的な言語活動の指導計画を研究協力校と合同で作成
- (2) 試案を基にした授業実践及び実践結果の分析と考察、研究のまとめの作成

IV 本年度の研究内容与方法

1 目標

中学校英語科における書く力を高める指導についての基本的な考え方を検討し、基本構想を立案する。それに基づき、まず、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導方法の具体的な手立てを盛り込んだ試案を作成する。モデルとなる試案の授業実践を行う。

2 研究内容与方法

- (1) 中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本的な考え方の検討（文献法）
- (2) 中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想の立案（文献法、研究協力校との協議）
- (3) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的指導を組み込んだ試案の作成（文献法、研究協力校との協議）

3 研究協力校

花巻市立大迫中学校

V 研究結果の分析と考察

1 中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本的な考え方

- (1) 学習指導要領における実践的コミュニケーション能力について

現在、中学校英語科に求められているコミュニケーション能力は、単に英語の文法や語彙についての知識があるだけではなく、実際に情報や相手の意向を理解したり、自分の考えなどを表現したりすることを目的として英語を運用することができる実践的コミュニケーション能力である。学習指導要領における外国語の目標にも「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養うこと」が明示され、強調されている。「実践的」という修飾語は、現実的な場面での言語使用を意識した指導を行うということである。

また、「聞くことや話すことなど」という修飾語は実践的コミュニケーション能力の基礎を養う指導の重点を音声に置くことを示している。教師は「聞くこと」「話すこと」という音声コミュニケーションを重視し、形態・意味だけではなく、場面・機能を重視した言語活動を立案し、生徒が英語を的確に理解し、自分の考えや気持ちを表現できるコミュニケーション能力を育成していかなければならないのである。

さらに、このような言語活動は「読むこと」や「書くこと」の領域との関連を図っていくことも必要とされている。つまり、外国語科においては、3年間という大きなスパンの中で言語材料の理解・練習のための言語活動の場と実際にコミュニケーションを図るための言語活動の場の相補関係に配慮しつつ、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4領域を有機的に関連付けた指導過程を指導者の判断で立案していくことが求められているのである。

- (2) 書く力の実態の概要

現在、書く力の定着率の低さが全国的に指摘されている。学力に関する調査等の結果から、「書くこと」の領域での指導改善に取り組んでいる都道府県は非常に多くなってきている。本県においても、平成16年度学習定着度状況調査や、地方分権研究会が実施した四県統一学力テストにおいて、「書く」領域での正答率が低いことが明らかになった。また、その傾向を分析してみると、①語彙が習得されていない（基礎的な単語を書く問題の正答率が低い）、②基本的な文法や語順ができていない（基本表現を英語で書く問題の正答率が低い）、③まとまりの

ある複数の文を書くことに慣れていない（「学校紹介」というテーマで3文以上の英文を書く問題の正答率が低く、無解答率が48%）と、「書くこと」の領域での指導改善の必要性が明らかになっている。特に本県の場合は第1学年での基礎的な単語の書き取りの段階ですでに正答率が低いという結果が出ており、指導改善の必要性は明らかである。

(3) 書く力が定着しない原因

本県において、書く力が十分に身に付いているとは言えない原因は次のように推測される。

ア コミュニケーションを目的として書く経験の不足

今までの「書くこと」の指導は、言語材料（単語や基本表現）の定着を目指し、繰り返し書く活動に重点が置かれてきた。教科書の単元（題材）の順番に沿って、授業で習った単語や基本表現を家庭学習等で繰り返し練習させ、小テスト等で書く力として評価するのが一般的であった。

「書くこと」の領域の言語活動は、語彙や基本表現等の言語材料が音声面だけではなく、綴りと結び付いた知識として記憶されていなければならないからである。

しかし、このような繰り返し練習は単語の綴りや基本表現の形態の正確性を重視するあまり、言語を実際に使用することを意識しない状態、つまりコミュニケーションを目的としない状態での繰り返し練習になりがちであった。このような練習は丸暗記に終わることが多く、長期的な記憶には残りにくい。反復練習によって、単語や基本表現で断片的に記憶が残っていたとしても、トピックに基づいて言語材料を活用して書くというような自由度の高い英作文、あるいは読み手を意識し、コミュニケーションの手段として「書くこと」には対応できないのである。

イ コミュニケーションを目的として書く活動のための基礎的能力の不足

アの原因に加え、実質上削減された授業時間数の中で、授業は学習指導要領で強調されている「聞くこと」「話すこと」の言語活動に指導の意識が集中し、文字を通した「読むこと」「書くこと」の活動が減少していることも原因だと推測する。言語活動を音声中心で進めることは学習指導要領で求められていることであるが、音声を中心としたコミュニケーション活動に時間をかけすぎ、授業において、単語や基本表現を音読したり、筆写したりする活動の時間が減少しているのではないかと考える。その結果が語彙や基本表現を書くという問題の正答率に現れているのではないかと推測する。

単語や基本表現という言語材料を正確に書くためには、繰り返し書く練習が必要である。しかし、単語や基本表現を文字の綴りから音声化できない、つまり、音読できない状態で反復練習を行ったとしても、有効な練習にはなり得ない。単語や基本表現の意味を理解し、音声として再生できてこそ、家庭学習等における反復練習が効果的になり、言語材料を正確に書く力につながるのである。

(4) 中学校英語科における書く力が育った生徒の姿

学習指導要領における「書くこと」の目標は、「英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」である。単に与えられた文を機械的に繰り返したり、語や文を書き写したりするだけではなく、学習指導要領の言語材料で示す初歩的な英語を用いてコミュニケーションのための自己表現が図れるようにすることが目標である。よって本研究においては中学校英語科における書く力が高まった生徒の姿を次頁【表1】のようにとらえる。

【表1】中学校英語科における書く力が高まった生徒の姿

中学校英語科における書く力が高まった生徒の姿	
①	初歩的な英語（単語、連語、基本表現）を正しく書くことができる（言語材料が定着した姿）
②	状況や場面に応じて自分の考えや気持ちを適切に書くことができる（実践的コミュニケーション能力が養われた）

①は言語材料が定着し、単語や基本表現を正確に「書くこと」ができるようになった姿を表している。「書くこと」の基礎的能力である。②はコミュニケーションのための自己表現ができるようになった姿を表している。②の姿が書く力の最終ゴール像である。しかし、②の姿を実現するためには基礎的な能力となる①の姿が不可欠なのである。

(5) 中学校英語科における書く力の構成要素

【表1】の書く力が高まった生徒の姿から、中学校英語科において育成すべき書く力の構成要素を【表2】のようにとらえた。

【表2】中学校英語科における書く力の構成要素

構成要素	意 味	
コミュニケーションを支える基礎的能力	①語彙力	初歩的な英単語・連語についての知識・理解が身に付いている
	②文法力	英文の構造（語順）についての知識・理解が身に付いている
	③音と文字をつなぐ力	初歩的な英語（英単語・連語・基本表現）を綴りから音声化できる
コミュニケーションとして書く力	コミュニケーションを支える基礎的能力を基に、言語の使用場面や言語の働きをとらえて、自分の考えや気持ちを適切に表現できる	

【注】①～③はコミュニケーションを支える基礎的能力の下位要素である

ア コミュニケーションを支える基礎的能力

コミュニケーションを支える基礎的能力とは【表1】における求める生徒の姿①の要素である。実際にコミュニケーションとして書く活動を行うために必要な基礎的能力として、次の三つの下位要素を設定した。このような基礎的能力は、短期間の指導で生徒に身に付く力ではなく、「培う」べき力である。「培う」とは「長い時間をかけて育てる」という意味（大辞林第二版）である。したがって、本研究においては継続的な指導を行うという意味で「基礎的能力を培う」という表現を用いることにする。

① 語彙力

コミュニケーションを図る活動を行うためには、初歩的な単語や連語についての知識と理解は不可欠である。中学校英語科における授業において、語彙力は教科書の題材を中心に、主として「聞くこと」「話すこと」を中心としたコミュニケーション活動で培う力である。

② 文法力（語順理解）

ここでいう文法力とは、基本表現を暗記するだけでなく、主語と動詞を骨格とした英文構造を理解し、正しい語順で文を生成できる力を表す。①と同様に現在の英語の授業では教科書の題材を基に、主として「聞くこと」「話すこと」を中心としたコミュニケーション活動で培う力である。

③ 文字と音をつなぐ力

中学校英語科における英語の授業は、「聞くこと」「話すこと」を中心に展開される。した

がって、①語彙力、②文法力は主として音声を中心とした言語活動で培われる知識・理解である。このような知識・理解を書く力と関連付けるためには「聞くこと」「話すこと」という言語活動で培われた音声技能を文字をとおして運用する力（「読む力」「書く力」）と関連付ける必要がある。

初歩的な単語や基本表現を正確に書くためには、繰り返し書いて練習することが必要である。しかし、まず、単語の綴りを音声として再生できる力がなければ単語や基本表現を繰り返し書く練習は効果がない。「読めない」単語は「書けない」のである。授業で生徒たちに正確に書くための繰り返し練習を十分に与えることは時間的に難しい。しかし、単語や基本表現を音声として再生する力、すなわち、音と文字つなぐ力を培うことで、その繰り返し練習を効果的にすることは可能なのである。このような考え方で書く力の基礎的能力として、音と文字をつなぐ力を培うべき構成要素に設定した。

本研究においては、コミュニケーションを支える基礎的能力の下位要素である三つの要素のうち、「書くこと」へ発展する基礎的能力として、従来の語彙力、文法力に新たに文字と音をつなぐ力を加える。この力を培うことで、生徒の繰り返し練習の有効性が高まり、初歩的な英語を正しく書くことができる生徒が育つと考える。

イ コミュニケーションとして書く力

実践的コミュニケーション能力を書く力という視点で具体化した構成要素である。実際にコミュニケーションを図る場面において、言語の働きと言語使用の場面を意識し、アの基礎的能力を活用し、コミュニケーションとして書く力のことである。

ただし、言語の実際の使用場面において、コミュニケーションは、「書くこと」の領域のみで行われることは少ない。メールの交換という使用場面においては、メールの内容を「読む」という活動がかかわってくるだろうし、メールの内容を要約して誰かに「話す」ことも考えられる。つまり、コミュニケーションは実践的になるほど、4領域が密接に結び付いた言語活動となるのである。よってコミュニケーションとして書く力は単独で育成される力ではなく、総合的なコミュニケーション活動の経験を積むことで、少しずつ育成される力である。

学習指導要領の目標では「実践的コミュニケーション能力を養う」という表現が使われている。よって本研究においても、コミュニケーションとしての書く力に対しては、「養う」という表記を用いることにする。

2 中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想

現在の中学校英語科において求められているのは実践的コミュニケーション能力であり、その指導の重点は「聞くこと」「話すこと」を中心とした音声コミュニケーションに置かれている。したがって、書く力を高めるために、音声コミュニケーション活動の時間を減らし、「書くこと」の活動の時間を増やすという指導改善は適切ではない。あくまで、指導の重点を音声コミュニケーションに置き、「書くこと」の指導を関連付けるという方向性が必要である。

では、重点となる「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践的コミュニケーション能力を養う指導をどのようにとらえればよいのか。

(1) 「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践的コミュニケーション能力を養う指導について

学習指導要領における実践的コミュニケーション能力を育成するためのポイントは、言語材料の理解と練習のための言語活動と実際にコミュニケーションを図る活動のバランスである。バランスとは、コミュニケーションを図る活動をどう設定し、そのために必要な語彙や基本表現の練

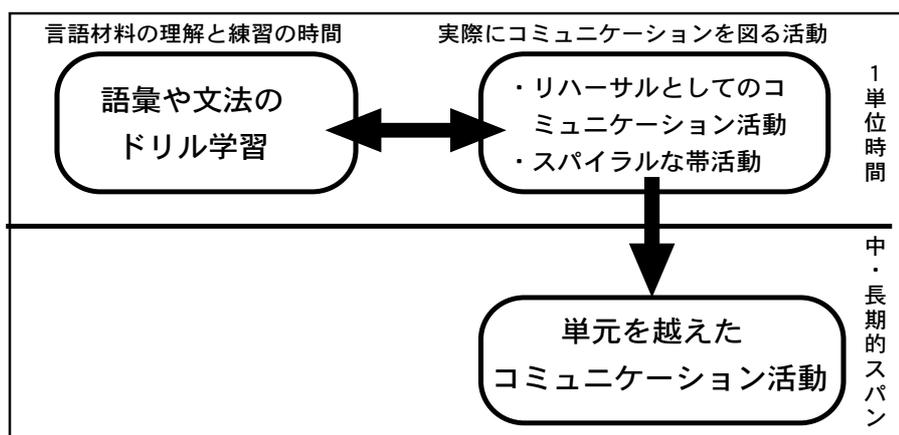
習の時間をどのように設定するかということである。「書くこと」と同じ表現の領域である「話すこと」の領域においては、このバランスについての様々な実践が行われている。共通するのが、言語の機能や場面を具体的に提示したイベント的なコミュニケーション活動を、単元や学期ごとに中・長期的なスパンで設定する実践である。本多(2003)は「言語としての英語の運用力を身につけるには、文法事項中心のシラバスを順に教えるという従来の発想の指導では実践的コミュニケーション能力の育成には至らない。」としている。「単元(題材)の中では、ドリル学習を十分に行って基礎的な能力を培い、運用能力を高めるためにスピーチやチャットなどの活動を単元を越えて設定したり、帯活動でスパイラルに使用する機会を作ったりすることが必要である。」と指摘している。

三浦(2003)はこのような単元を越えて設定する言語活動を、「オーセンティックな(本物の)コミュニケーション活動」と規定した。英語使用の必然性、自己関与感、意味中心のやりとりを視点として、より実践的な言語活動を複数単元終了後に設定し、その活動を行うまでの「リハーサル的な言語活動」を「コミュニケーションを志向した文法指導」として、日常の授業で行う方法を提案している。

従来の英語の指導は言語材料の理解を図り、定着させてから実際にコミュニケーションを図る活動へとつなげていく考え方に偏っていた。しかし、今後の英語の授業は【図1】のように本多の単元を越えた言語活動、三浦のオーセンティックなコミュニケーション活動のような実践的な

言語活動をまず計画し、その活動に向けて、語彙や基本表現等の言語材料の定着を図っていくという視点を持つことが大切なのである。

本研究は書く力を高める指導の研



【図1】話すことの領域における実践的コミュニケーション能力を育てる指導研究であるが、学習指導要領における目標を重視し、【図1】のような「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践的コミュニケーション能力育成のための指導を基本にして、構想を立案する。

(2) 「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践的コミュニケーション能力を養う指導過程に「書くこと」の指導を関連付けた指導

本研究では、音声コミュニケーションを中心とした指導に「書くこと」の指導を関連付けていくことが書く力を高めるための基本構想になる。では、どのように関連付ければよいのだろうか。書く力が低下した原因を基に、【図1】の指導に「書くこと」を関連付ける視点を次のようにとらえた。

ア 4 領域を関連させた総合的な言語活動

実践的コミュニケーションの能力を養うためには、生徒に実際にコミュニケーションを図る活動を経験させなければならない。経験させるためには、指導計画に位置付け、実際に活動を設定しなければならない。

例えば、「自分の学校を紹介する文を書く」等のトピックに基づいて英文を書く活動は、自由

度が高く、実践的なコミュニケーションを目的とした言語活動であるが、このような言語活動は時間がかかるので、1単位時間に位置付けるのは難しい。したがって、【図1】の「話すこと」の領域における「単元を越えたコミュニケーション活動」のような中・長期的スパンで行う言語活動と関連付けて行うのが効果的である。このような活動は例えば「新しいALTに自分の学校を紹介するスピーチをしよう」というタイトルでスピーチ原稿を書かせたり、スピーチとして発表後の活動で掲示物用に清書させたり、生徒の作品を冊子にして「読むこと」の領域と関連付けたりすることができる。このようにひとつの領域だけではなく、いくつかの領域と関連付けて行う言語活動、これが本研究における「総合的な言語活動」である。

このような4領域を関連付けた総合的な言語活動を指導計画に位置付け、生徒にコミュニケーションを目的として書く経験を実際に積ませることが、状況や場面に応じて自分の考えや気持ちを適切に書くことができる生徒、3頁【表1】の目指す生徒の姿②の育成につながるのである。

イ コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導

アのような総合的な言語活動を行うには、単語や基本表現等の言語材料の知識・理解が必要である。特に「書くこと」の言語活動を行うためには言語材料を正しく書く力が必要になる。単語や基本表現を正しく書くためには、まず、文型練習やコミュニケーション活動等、「聞くこと」「話すこと」を重視した言語活動を十分行い、語彙力や文法力（英語の語順指導）を培うことが大切である。現在の英語指導で最も重要視されている部分であり、本研究においても語彙と文法（語順理解）については(1)で述べた指導を行う。

従来の英語の指導では、このような音声重視の言語活動から「繰り返し」書いて練習する活動に直接進んでいた傾向があった。しかし、目指す生徒の姿①を実現するには音声コミュニケーション重視の前頁【図1】のような指導に、音と文字をつなぐ力を育てるという指導を加える必要がある。そのために必要な指導が音読である。

英語教育において音読指導は一般的なものであるが、その重要性については國広・千田(2001)が「知的記憶（語彙力・文法力）」を実際に言語を運用する技能である「運動記憶」に変えるトレーニングとしての音読とその後の筆写練習の有効性を検証し提案している。音声中心の言語活動で学習した語彙や文法を音読をとおして運動記憶に変え、音と文字をつなぐ力として育成することは、「書くこと」につながる基礎的能力として、指導過程で見直すべき視点と言える。このような理由で本研究ではコミュニケーションを志向した音読指導（スーパーインプット&イージーアウトプット）を手だてとして提案し、「書くこと」の基礎的能力を培う指導を行う。

(3) コミュニケーションを志向した音読指導（スーパーインプット&イージーアウトプット）

ア 音と文字をつなぐために教科書題材の音読の指導を指導過程に位置付ける

生徒が単語や基本表現を繰り返し書いて練習し、正しく書く力を身に付けるには、教科書題材の単語や基本表現を音読できなければならない。この場合の音読とは、ネイティブに近い発音やイントネーション等の流暢性に焦点をあてた技能ではなく、単語や基本表現の綴りを見て、「音声として再生」することを指す。単語や基本表現は音声化することができてこそ、「書くこと」ができるからである。「読めない」単語は「書けない」のである。生徒が言語材料に文字として触れるのは教科書の英文である。したがって、授業においては、教科書題材の音読の指導を「書くこと」の基礎的な能力ととらえ、十分に行う必要がある。この活動が本研究における「スーパーインプット」である。

イ 教科書題材の音読の指導を、実際にコミュニケーションを図る活動と連動させる

音読は重要な指導であるが、ただ繰り返すだけでは、生徒が「書くこと」の基礎的能力を身に付けることは難しい。音読の指導は、どのような英語の授業でも行われており、目新しい指導ではない。ただ、従来の音読指導は目的がはっきりしないものが多かったのではないかと考える。

音読指導は教科書の内容理解の後に、全体または個人で練習して発表という形式が多い。しかし、大切なのは何のために音読をするか、ということである。音読の目的が単に綴りを読むだけの訓練であれば、生徒のコミュニケーションへの意欲は育たない。また、言語の意味、言語の働きや使用場面等、言語を実際に使用することを意識しない状態での繰り返し練習は、単なる暗記に終わることが多く、長期的な記憶には残らないのである。

こうした状況を改善するには音読の指導もまた、実践的コミュニケーション能力の育成を志向するものである必要がある。

そこで、本研究においては教科書の題材の音読を自己表現活動に発展させ、「話すこと」「書くこと」という表現の領域における実際にコミュニケーションを図る活動と連動させる。例えば教科書の対話文の一部を、オープンセンテンスにして、ペアで自己表現を考え、暗唱して発表し、さらに自己表現した英文を書くという活動である。この活動を本研究においては「イージーアウトプット」と称する。この言語活動において、教科書の音読は、「話すこと」という表現領域の第一歩に位置付けられる。そして、「自分の考えや気持ちを伝える」という自己表現の要素を加えて、発表することにより、「話すこと」のコミュニケーション活動へと発展する。この自己表現文を書いてみる活動は言語の意味、言語の働き、使用場面と結び付いておりコミュニケーションとして書く力の基礎的能力となるのである。

ウ 長期的・継続的な指導で培う

こうした活動を日常の授業で継続的に行うことにより、生徒は音声とスペリングの関係、言語の意味、言語の働き、言語の使用場面を意識して音読や自己表現活動に取り組むようになる。このような基礎的能力を培った後で、家庭学習等で繰り返し書く練習を行えば、生徒の初歩的な英語を正しく書く力は効果的に育成され、総合的な言語活動を行うための基礎的能力が培われるのである。

(4) 中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想図

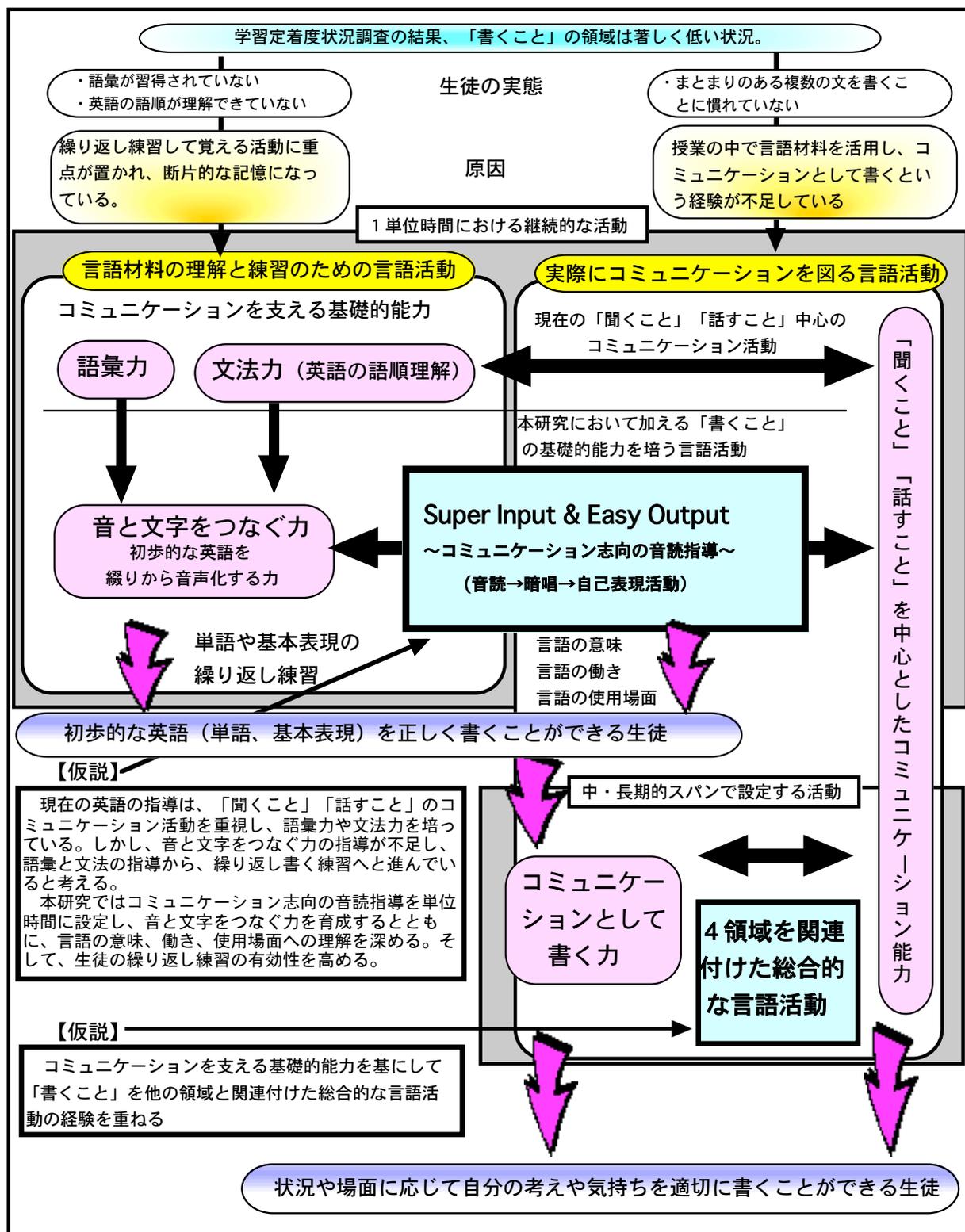
以上のような書く力を高めるための指導の基本構想と構成要素を基に、中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想図を次頁【図2】のように作成した。

(5) 基本構想に基づく指導の進め方

本研究は「聞くこと」「話すこと」を中心とした日常的な言語活動で基礎的能力を培い、単元を越えた言語活動に「書くこと」の領域を関連付けるという仮説をとっているため、手だての試案の有効性は長期的・継続的な実践をとおしてこそ、検証されるものである。よって、まず、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導のための手だての試案を作成し、研究協力校においてモデルとして実践する。その後、共同で修正を加えながら研究協力校の教員に継続的に実践してもらい、「コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導」についての検証を行う。

中・長期的なスパンで計画する4領域を関連付けた総合的な言語活動は1年次の実践を基に2年次に協力校と合同で年間指導計画を立案し、学校、学年としての到達目標を設定してから、実践するものである。しかし、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導はこのような総合的な言語活動を志向して行うものであり、1年次のモデルとなる手だての試案にも例として位置付け、

研究協力校における目標や計画作成の参考にしてもらいたいと考えている。本研究は研究協力校との合同研究の形をとることで長期的・継続的な試案の実践を可能にすることにより、実践的な成果を目指すものである。



【図 2】 中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想図

3 コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導のための手だての試案

(1) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導の手だて

本研究におけるコミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導は、教科書の単元（題材）を取り扱う1単位時間の指導過程に、「書くこと」の基礎的能力を培い、コミュニケーション活動と連動する音読の指導を位置付ける指導である。教科書の単元（題材）を扱う場合、【表3】のような言語活動を行うのが一般的であろう。このような一般的な指導過程に手だてをどう位置付けるかを以下に示す。

【表3】単位時間における教科書題材の一般的指導過程

順	主な指導過程	留意点
1	前時の復習	*教科書本文の題材により基本表現の導入や文型練習、疑似CAが本文の内容理解の後に設定される場合もある。 *教科書本文の内容理解と並行して新出単語を導入していく場合もある
2	基本表現の導入	
3	文型練習や疑似CA	
4	新出語句の導入	
5	教科書本文の内容理解	
6	音読練習	
7	学習のまとめ	

まず、十分な音読練習で音と文字をつなぐ力を強化し、生徒の繰り返し書く練習を効果的にすることが必要である。【表4】①の指導である。

次にコミュニケーション活動と連動させることが必要である。従来の「書くこと」の指導は前時の復習で単語テストを行ったり、文型練習や疑似コミュニケーション活動（疑似CA）と関連付けて基本表現を書いたり、学習のまとめで基本表現を基に簡単な自己表現や英作文を行う指導が一般的であったと思われる。このような指導も形態の理解という面で有効であるといえるが、実際にコミュニケーションを図る活動との連動性、すなわち言語の働きや使用場面を意識するという視点が不足していた。

単語や基本表現が正確に書けていたとしても、言語の働きや使用場面を意識することができなければ、自分の考えや意向を表現することはできないのである。そのために【表4】②のように音読活動を「話すこと」の自己表現活動に発展させ、語彙力・文法力・音と文字をつなぐ力という基礎的能力を培うとともに言語の働きや使用場面を生徒に意識させる指導を行う。

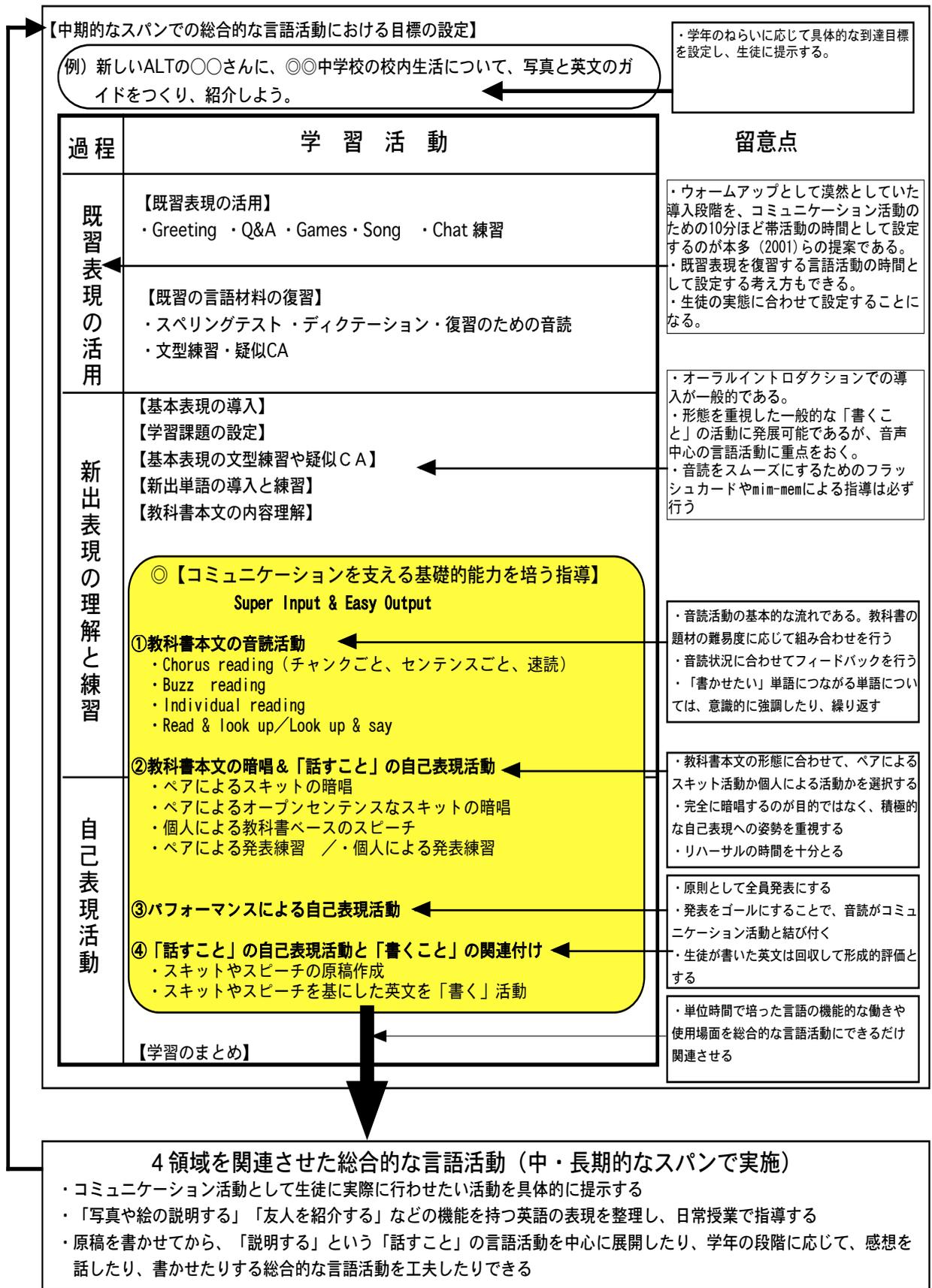
最後に、このような「話すこと」の自己表現活動を「書く」活動と関連付ける。【表4】③の指導である。例えば、自己表現活動におけるスピーチやスキットの原稿を「書く」ことは、言語材料が生徒の実体験や生活と結びついている。こうすることで与えられた語や文を書き写すだけの活動とは一線を画し、コミュニケーションとして書く力の基礎的能力を培う活動となるのである。本研究においては、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導の手だてとしての一連の指導を、スーパーインプット&イージーアウトプットとして実践する。

【表4】コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導の手だて

手順	スーパーインプット&イージーアウトプット(Super Input & Easy Output)の指導
①	音読活動により単語や基本表現を綴りから音声化できる力を培う
②	音読活動を暗唱、自己表現（スピーチやスキット）へ発展させる
③	「話すこと」の自己表現活動と「書くこと」の活動を関連付ける

(2) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導のための手だての試案

このような考えで、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導を取り入れた手だての試案を【図3】のように作成した。



【図3】 コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導のための手だての試案

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

この研究は、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導と4領域を関連させた総合的言語活動の工夫をとおして、中学校英語科における書く力を高める指導の在り方を明らかにし、学習指導の改善に役立てるものである。本年度の研究はまず、中学校英語科における書く力を高める指導についての考え方を検討し、基本構想を立案することであった。それに基づき、まずコミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導方法の具体的手だてを盛り込んだ試案を作成した。

以下に、それらの研究の成果について総括的にまとめる。

(1) 中学校英語科における書く力を高める指導についての基本的な考え方の検討

主題に関わって、本県における書く力についてのデータを過去の学習定着度状況調査や地方分権研究会実施の四県合同統一学力テストから見直し、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導を4領域を関連させた総合的言語活動につなげるという「書くこと」の指導改善のための基本的方針を明らかにすることができた。また、主題にかかわる先行研究や文献により、「書くこと」の基礎的な能力の構成要素を、「文字と音をつなぐ力」という視点で焦点化することができた。

(2) 中学校英語科における書く力を高める指導の基本構想の立案

主題にかかわる先行研究や文献により、書く力を高める指導についての基本的な考え方にに基づき、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導を基に、4領域を関連させた総合的言語活動につなげ、「書くこと」と関連付けるという基本構想をコミュニケーション志向の音読指導という手だてを用いて、立案することができた。

(3) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導のための手だての試案の作成

基本的な考え方と基本構想で述べた視点を基に、音読指導の工夫により、音と文字をつなぐ力を育成し、「書くこと」の基礎的能力を培うとともに、コミュニケーション活動と連動させることにより、4領域を関連させた総合的言語活動へつながる手だての試案を作成することができた。

2 今後の課題

(1) 試案に基づくモデル実践を行い、結果を分析・修正し研究協力校における継続的な実践につなげること。

(2) 4領域における総合的言語活動についての先行研究や文献を調査し、コミュニケーションを支える基礎的能力を効果的に活用できる言語活動を工夫し、研究協力校に提案すること。

おわりに

この研究を進めるに当たって、ご協力頂いた研究協力校の先生方に心から感謝を申し上げます。

【引用文献】

三浦 隆(2002～2003), 『実践的コミュニケーション能力を高める英語科の指導に関する研究～オーセンティックなコミュニケーション活動につなげる文法指導をとおして～』

本多敏幸(2003), 『到達目標に向けての指導と評価』, 教育出版

高島英幸編著(2000), 『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』, 大修館書店

高島英幸編著(2005), 『英語のタスク活動とタスク』, 大修館書店

國弘正雄編著, 久保野雅史, 千田潤一(2001), 『英会話・ぜったい音読・入門編』, 講談社

【参考文献】

Canale, M. and M. Swain. 1980. Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing, Applied Linguistics.

Littlewood, W. 1981. Communicative Language Teaching, Cambridge University Press.

伊藤治己編著(1999), 『コミュニケーションのための4技能の指導』, 教育出版

土屋澄男(2004), 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』, 研究社

田中武夫・田中知聡(2003), 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』, 大修館書店

田中正道編著(1999), 『伝達意欲を高めるテストと評価』, 教育出版

谷口賢一郎(1998), 『英語教育改善へのフィロソフィー』, 大修館書店

平田和人編(2002), 『中学校英語科のリニューアルと授業デザイン』, 明治図書

松本茂編著(1999), 『生徒を変えるコミュニケーション活動』, 教育出版

千葉 司, 鈴木俊行(1997), 『英語科における「話すこと」と「書くこと」の関連を図る学習指導の在り方に関する研究』